No.47

発効日：2011.6.1　発行：うしく整形外科クリニック
住所：横浜市青葉区美しが丘1-13-1 電話：045-904-6937

うしクリ通信

湿布の話し

普段湿布は薬局で簡単に買えますが、整形外科でも多く処方される薬剤です。テレビでも面白おかしく、時には凝ったCGのコマーシャルを見かけるくらい、日本人には身近なものです。

まず2種類に分けることができます。消炎鎮痛剤が含まれていないものを「第1世代」、含まれているものを「第2世代」といいます。

前者は冷感を感じさせるメントールやサリチル酸を含む通称「冷湿布」といわれるタイプのもので、後者はジクロフェナックやフェルビナックなどの非ステロイド系消炎鎮痛剤を含む「痛み止め」「腫れ止め」の湿布です。「冷湿布」とはいうもののヒヤッとはしますが本当に冷やしているわけではないので、冷やした方がよい急性の打撲や捻挫などのケガにも、温めた方がよい慢性の病気にも、鎮痛剤含有の湿布が使用できます。現在医療機関では第1世代の湿布は処方されず、「経皮吸収消炎鎮痛剤」と書かれた第2世代の湿布が処方されます。

温湿布といわれるものは、皮膚温を上昇させるトウガラシエキスやカプサイシンなどの成分が含まれています。当院では、温感タイプの湿布は消炎鎮痛剤の含有量が少なく、ひりひり感じたり、かぶれやすい印象があるため、主に希望される患者様に処方するようにしています。

生地の厚い水分を含んだパップ剤と薄いテープ状のプラスター剤といった形態の違いでも別けることができます。パップ剤は貼りはじめに気化熱で冷たく感じるので冷湿布と思われがちですが、水分が蒸発すればすぐ冷たくなくなります。パップ剤は1日2回貼ることが多く、プラスター剤は1日1回で済むことが多いです。これは湿布の開発試験の際に、有効性の高さで判断された結果です。

湿布でかぶれた経験をお持ちの方もいらっしゃると思いますが、絶対かぶれない湿布はありません。かぶれやすい方はまず貼付時間を短くしましょう。3-4時間貼るだけでも効果はあります。また貼る部位によってもかぶれたりかぶれなかったりしますし、汗をかく季節はかぶれやすいので注意が必要です。また、種類によっては「日光過敏症」と言って、湿布を剥がしたあとに紫外線に当たってかぶれることがあります。既往のある方は湿布の種類を変えるか、遮光するようにしましょう。

内服ほどではないにせよ、消炎鎮痛物質が皮膚から吸収され血中に移行します。喘息、特にアスピリン喘息のある方や、妊婦さんの使用は禁忌とされています。

最近は、腰痛や四肢関節痛に効果のある巨力な湿布が発売されました。慢性の痛みに悩まされていた方には朗報です。診察時に御相談ください。

院長コラム

今回の大震災では個人的に学ぶことが多くありました。ライフラインが途絶えたところで何ができるのか。準備していた防災用品や医療機器に使う無停電装置の貧弱さ。震災直後に必要なのはボランティアではなくそれぞれのプロということ。そして、情報ソースをたくさん持つことです。

震災直後に携帯電話が使えずに困りました。その後ソーシャルメディアなどのネットを利用して情報を集めた方が多かったようです。テレビや新聞、政府の報じる情報がどれだけ偏っていたか、ここにきて露呈されています。ネット上ではすでに伝えられていたことが、今さらのように報道されるのに、違和感を感じます。